



TITLE:

雜報

AUTHOR(S):

---

CITATION:

雜報. 天界 1921, 1(10): 196-197

ISSUE DATE:

1921-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159604>

RIGHT:

## 雜報

## ●木星と土星の合 九月二十一、二日

頭に木星と土星とが獅子座と乙女座との間で合となるが、恰も此時は太陽も亦此の邊にある。即ち換言すれば、此頃、木星と土星と地球と太陽と秋分點と五つのものが略々一直線上に來るので、こんな事は誠に珍らしいと言はねばならぬ。木星の公轉週期は一一・八六一九八年であり、土星のそれは二九・四五七一七年であるから、此の兩星が相互に會合するのは一九・八五八八六年毎であるが、かやうな合の起る場所が天を一週するのは五九年であり、之れが又太陽と一定の點で會するのは實に五三〇二年に一度の割合である。して見ると此度の如き事が天に起つた最近の年は西暦紀元前三三八二年であつた筈である。

抑も星座の内で、最も古く出來たものは所謂黃道十二座で、此等は専ら遊星(廣義の)位置を示すために作られたものであるが、しかも其の十二座は始めの頃、乙女座を最初とし獅子座を最終として數へ擧げた形跡がある。之れを象徴したものがエゼプトのスフィンク

スであれば誰でも御承知の通り、上體が婦人像で、胴は獅子の形を取つてゐる。即ちスフィンクスは乙女と獅子(十二座の最初と最終)とを表はすことによつて、黃道十二座全部を象徴したものである。そして此の十二座が發明されたのが紀元前三千年頃であるから其の頃木星と土星とが乙女座と獅子座のあたりで會合したことが天文學上の一時期を人々に暗示したと見るべきでなからうか。そうすれば今年の會合も頗る興味あるものと見ればならぬ——之れはドウソン(W. B. Dawson)氏の說である。

## ●ウインネケ流星群の觀測 京都大學天文臺に於ては、去る六月の末、頗る天候が悪かつたのにもかゝらず、山本、古川、中村諸氏が流星群觀測のために活動した。古川氏は始終京都の地を離れなかつたが殆んど毎日曇天で何の收穫も無かつた。又、山本氏は六月二十五日彥根まで出掛けたが、やはり曇られた。しかるに同日中村氏は江州八幡に出張し、雲間から四個の流星を捕へ、翌日又同所で三十三個を獲たが、此の二日目の星の中に始めて確かにウインネケ群に屬するものを發見した。其の數は十四。次で二十七日は

山本、中村兩氏同道して山陰遠征の途に入り、其の夜は丹波の福知山で四十二星(其中でウインネケ群のは二十二個)を獲た。二十八日から四日間、兩氏は鳥取に滞在したが、二十八日に三十五星(内、ウインネケ群のは二十七個、越えて七月一日に二十星(内、ウインネケ群のは十五個))を見たのみで、其の中間の二十九、三十兩日は全然雨に妨けられた。兩氏は七月二日歸洛、翌三日からは中村氏がやはり大學の外庭で流星觀測を續けた。其の結果は收穫頗る多くて、正確な觀測だけでも

|       |             |
|-------|-------------|
| 七月三日  | 五十一星(*二十四星) |
| 同 四日  | 四十八星(*十二星)  |
| 同 五日  | 二十八星(*十四星)  |
| 同 六日  | 三星(*三星)     |
| 同 十一日 | 二十一星(*十三星)  |

(但し\*はウインネケ流星の數)

殊に七月三日と五日頃はウインネケ群の星だけでも、とても充分に觀測しきれないで、只、出現する時の數だけを一定時間中に數へたものが左の如き有様である。

結局、七月十一日までに認めたウインネケ流星の總數は

正確に觀測したのも 一四四個  
數だけを數へたのも 二四九個

但し此等の數は殆んど總て、雲の絶え間から拾ひ集めたと言ふべきたちのものであるから若し理想的の晴夜であつたならば、如何程多數の流星が觀測されたであらうかは、全く想像に餘るほどである。中村氏の銳眼は五等や六等の微な流星をも易々として捕へたのであるが、氏の觀察する所によれば、ウイネケ流星群の星は其の現はれ方が著しい特徴を持つてゐて、多くは二三個づゝ連續して現はれそれが何れも皆、灰を蒔いたやうな跡を残すので、他の群の星とは一見して見分けられるといふ。

其の後の觀測によれば、ウイネケ流星群は八月に入つてから、尙よく見受けられ、輻射點も移動の様子が明確に觀えるといふ。

ウイネケ流星群の觀測群は、東京天文臺からも神田、井上兩氏が北海道に出張して觀測せられ五日間に總計十九個の星を見られたことが報告せられてゐる。尙又、我が同好會員中にも熱心に空を見守つた人々があるが、大抵は曇天で無收穫であつたことから考へるに山本、中村兩氏の遠征はむしろ成功であつたといふべきである。

中村氏の豊富な觀測結果は、目下整理中であるが、此の中に立流な歐文報告となつて發表される筈である。

●藤井天文臺落成式 豫て本誌に紹介した大津の藤井望遠鏡は、京都の島津製作所の技師が、京都大學の七吋鏡室をモデルとして設計した圓屋根の中に置かれることになり春以來、大津石場濱の月光亭内に工事が進められてゐたが、五月全く竣工したので、同十五日、藤井氏は多數の知己友人を招いて盛大なる落成式を挙げられた。山本助教も招かれて之れに列席した。

●長野縣の天文教育 長野縣教育會は本年度から尋常第四學年以上の理科に天文教材を多く加へ、殊に星座については一通りの組織的教育を施されてゐるのは、他府縣の企て及ばざる氣のさいた方針といふべきである。尙かゝる風潮を促進せんため、同縣教育會は去る七月末、京都大學の山本助教を聘して左の如く天文學講習會を開いた。

「ニウトン法則による天體運行論」  
七月二十一、二兩日、上田にて  
同 二十六、七兩日、松本にて  
「文化要素としての天文學」  
七月二十三、四兩日、長野にて

同 二十八、九兩日、上諏訪にて  
尙又此の機に同縣下高井郡教育會は同助教を聘して、七月十九、二十日中野町で、「實際天文學」なる題の下に講習會を開いた。

右の五ヶ所の講習は、何れも百名乃至三百名の來會者が、殆んど全縣下から集まり、連日熱心に聽講した。

●アルクトウルクスの直徑 本誌第四號に北米マイケルソン教授が新干涉法を應用してベテルギウス星の直徑を測定した事を報じたが、最近報によれば、同教授は又アルクトウルクス星（牧夫座 $\alpha$ 星）を同方法にて測定し、太陽直徑の二十倍といふ結果を得たといふ。

●ミス・ジェンキンスを迎ふ 昨夏米國よりの通信により、吾人はミス・ジェンキンス嬢が我國に渡來せられるのを知つたが、近頃に至り、愈々同嬢が東京駿河臺に居られるのを知り、早速、文を送つて歓迎の意を表し、我が同好會に入會をすゝめたら、別項英文欄の如く、快く入會された。

ジェンキンス嬢は大正元年以來、長く米國ホリヨーク大學天文臺に在つて太陽の觀測や恒星の運動等の研究せられ、今日までに多數の論文や報告を出してゐられる。殊に一昨年以來は米國變光星學會のために光度の協同觀測に従事せられたから、京都大學の山本助教とは夙に辱知の間柄であつた。此度は同嬢が基督教の一宣教師として來朝せられたのであるが、流石に學者出身であるから、東京の宿にも三吋望遠鏡を携帯してゐられて、今もやはり夜間は變光星の觀測を續行し、毎月米國ハバグアド大學へ報告してゐられる。去る八月二十一日には我が山本助教の出張のついでを以つて、同嬢を輕井澤の避暑地に訪ひ、親しく歡談を交へられた。